入り口からたった２メートルぐらいの距離にあります。鈴木先生は中国語がとても上手で、考えもはっきりしていて、話にユーモアがあります。面談は30分から40分続きました。お別れの際、先生が書いた中国小説の研究に関する本を贈ってくれました。鈴木先生の研究室を離れて、日本の学者の仕事熱心さと「書物の山に深く入り込み、めったに出てこない」という言葉通りであるということに感嘆させられ、心の中から敬慕の念が自然とこみ上げました。

授業後、佐野賢治先生と。

次は中国民俗学界で大変有名な佐野賢治教授です。佐野先生はもう古希の頃かと思われ、白髪混じりの髪は少し薄いながらも、後ろにきちんと整っていて、とてもしゃきっとしておられます。服装は洗練されていて、振る舞いには節度があり、熟練でかっこよく、若い頃の英気がひしひしと迫って来ます。佐野先生は学生の報告を子供のような純真な笑顔で聞きます。学問に本気で没頭している人だけが澄んだ心を持ち、雑念のない人だけが、童心を失わずにいることができるのだと思います。先生と一緒にいると、春風に浴すがごとく感じました。日本での学校訪問期間は主に先生の授業、学術会議への参加、先生と生徒の会食で過ごしました。このような経験は一生の貴重な栄誉です。

最後は非文字資料研究センター長の小熊誠教授です。小熊先生は50歳ぐらいで、背が高く、細面で黒縁のメガネをかけ、黒いダストコートを着ており、お洒落で才気あふれています。小熊先生は中国語がそれほど流ちょうではありませんが、非常にユーモアがあって､時にはチャーミングな仕草をされるので、とても親しみを感じます。訪問期間が終わる前に、先生はわざわざ日本の風情あふれるレストランで送別会を開いてくださり、私はひとしお光栄に感じました。

小熊誠先生と会食。

横浜での滞在期間、日本の風土と人情、学者の魅力、学術会議の謹厳さと有益性などは私に深い印象を与えました。一生忘れることはないでしょう！

過去と現在の間の舞踏

アナ　クリスチーナ　ヨコヤマ
（サンパウロ大学）

舞踏における現在の伝統的な日本文化の要素とは何だろうか？

この疑問から、私は神奈川大学非文字資料研究センターで実地調査を行った。横浜にある大野一雄舞踏研究所での大野慶人による舞踏ワークショップに参加すると同時に、私は慶應義塾大学アート・センターの土方巽アーカイヴ、東京国立博物館、鎌倉の寺院や池上本門寺、森アーツセンターギャラリーで開催された新北斎展を訪れた。また、歌舞伎座で二つの演目を観たりもした。

私の目的はこの短期間に様々な日本の芸術表現にアクセスすることで、大まかに文化的概観を把握するというものだった。このような形で、造形芸術、演劇、音楽、宗教、詩、新たな文献との出会いを、大野慶人との舞踏ワークショップにおいて反映させていった。

大野慶人はイメージ、テーマ、記憶、客体、自然の要素から自身のワークショップを行った。そうしたものは

横浜の大野一雄舞踏研究所リハーサルルームにて（2019 年 1 月、筆者撮影）

このように舞踏とともに示され、美的・詩的概念はこれらの要素の相互の出会いにおいて舞われるのである。これらは自らのスペクタクルを構築する中で自然をつき動かすという意味で、人間と同様、踊る存在なのである。ワークショップの中で、私たちは世界中数多くの子どもたちの命を奪う飢えを表現するダンスを、こうした死の沈黙を、そして表意文字を舞った。表意文字とは土方巽（1928-1986）によって使われた「空ダ -KARADA- 体 - 身体 -SHINTAI- 肉体 -NIKUTAI」という言葉 - 肉体を名づけるものである。竹と「かぐや姫」、私たちが体の中で移動させるたくさんの目についても表現した。そして 1960 年以来、父・大野一雄（1906-2010）と作品を収める大野一雄舞踏研究所のリハーサルルームに残る記憶も表現していた。

大野慶人が舞踏ワークショップで展示している表意文字のイメージ
（2019 年 1 月、筆者撮影）

この実地調査によって得られたこの奥深い経験のあとで、日本文化における過去と現在の対話がどれほど素晴らしいものかを発見した。東京国立博物館の展示や北斎の芸術家としての軌跡について調査を行い、歌舞伎の演技と上演中の客席からの肯定的な「叫び」（掛け声）との間に生まれる相互作用に目を奪われた。巨大な仏像 - 大仏 - の力強さや、公式のグレゴリオ暦では冬の季節だが、太陰暦では春を祝う池上本門寺の祭礼も目の当たりにした。そして、慶應義塾大学アート・センターにあった映像資料、衣装、ポスター、書籍などの豊富な資料も閲覧した。このセンターには徹底に徹底を重ねて土方巽を全力で研究し続ける森下隆教授がおられる。土方巽は大野一雄と並ぶ舞踏の創始者の 1 人であり、大野慶人の師匠でもあった。大野慶人が発した全ての言葉やワークショップで伝えられたテーマは、この千年にもわたる繊細な文化を映し出すものであった。

竹に体は教えられよ。大野慶人との舞踏ワークショップにて
（2019 年 1 月、筆者撮影）

私はブラジルに戻り、サンパウロ大学日本文化研究所の大学院での研究を修了し、大野慶人の舞踏を研究することに身を捧げている。舞踏は常に現実に対し応答し続け、絶えず変容する現代舞踊芸術でありながら、遠くから分析する際には無視されたり気づかれないものではあっても、その根底となる原理、すなわち日本文化の基盤となる概念に帰着すると考える。ブラジルのことわざを最後に引用しよう。「目に見えないものは心に感じることはできない」。

“私たちは本質と存在であり、
その二つは相互に変わりうる。
空間は、大きくても小さくても
存在の一部分なのだ。
私たちの感情は本質の一部分なのだ。”
2019 年 1 月 27 日　大野慶人